

東京芸術祭2019

インタビュー

東京芸術祭2019
総合ディレクター 宮城聡



世界の人 「こんな表現もあるのか」と 発見する作品を送り出す ゲートウェイの演劇祭を目指して

東京芸術祭2019が間もなく開幕する。
「東京芸術祭」とは？また“東京”で“芸術祭”を開催する理由は何なのか？
総合ディレクターを務める宮城聡に話を聞いた。

——最初に「東京芸術祭」の全体像をお聞かせ願えますか？というのも、東京オリンピックとの連動でアートも対象にしている「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の一環として実施されているということ、先行して開催されてきた舞台パフォーマンスの祭典「フェスティバル/トーキョー(F/T)」、さらに東京芸術劇場のプログラム「芸術オータムセレクション」などを包括しているのが「東京芸術祭」という関係性が、まだ広く伝わっていないと思うので。

宮城 確かにわかりにくいですね(笑)。それは、既存事業を整理しなかったことがひとつの原因だと思います。

——あえて整理しなかったということでしょうか？

宮城 はい。ひとつの選択肢として、スクラップ&ビルドは当然ありました。でも「東京芸術祭」の総合ディレクター就任を依頼された時、どんなフェスティバルにするのか決めるため、ひとつひとつの関連事業の関係者の方達にお会いしたんです。今お話に出たものに加え、豊島区の事業やあうるすぽっとの事業、「APAF(アジア舞台芸術祭)」などですね。そして直接お話を聞いて、どれもそれなりの蓄積が——事業自体もそうですが、マンパワーとして経験値の蓄積があることがわかりました。これは非常に大切な財産です。もし「東京芸術祭」を、新しいコンセプトを立て、キャラクターのはっきりしたフェスティバルとしてスタートさせたら、一瞬は注目されるかもしれませんが、でもそのために人的経験値を無くしたり途切れさせてしまったら、損失のほうが大きい。東京の舞台芸術界がこの先より良くなっていくために何が大事かを考えると、人を育て、また育った人をそのまま伸ばしていくほうがだろうと判断しました。

——物事を長い目で考えず、目先の効果で判断するのは、近年の日本の主流かもしれません。でもひとつの場所で蓄積されたノウハウや知識、人脈などは、一旦途切れると、簡単には取り返せませんね。

宮城 性格のはっきりしないという批判は去年もあり、もちろん甘んじて受けませんが、数年経って「これだけ多面体なフェスティバルって、むしろ東京らしいよね」と思ってもらえるんじゃないかと期待していますし、東京の演劇界

を担う人材が輩出されていけば「これで良かった」と言ってもらえるんじゃないかと思っています。

総合ディレクターとしての僕は、それらの既存事業を「東京芸術祭」という風呂敷に包んで結び、その結び目としてシンボリックな事業というのかな、去年始めたワンコインで野外公演を観てもらおうプログラムなどを手掛けようと考えています。

——今、芸術祭はアジア各地で増加する傾向にあり、日本よりも多くの予算が投入され、世界の注目を集めているものも少なくありません。そんな中で「東京芸術祭」をどう位置づけ、発展させようとお考えですか？

宮城 アジア地域のおもしろいことを考えているアーティストが、どの窓から世界に飛び出していくのが良いか——。それには東京が1番上手く機能すると僕は考えています。外から来てもらうのが得意な芸術祭と、外に吐き出していくのが目的の芸術祭があって、国内ですけど瀬戸内国際芸術祭は前者でしょう。後者の立場として、東京が世界へのルートが開ける可能性を示したいし、その役割を果たし得るし、ある意味、東京がやらないとダメだろうと思う。というも、残念ながら巨額の国家予算が投入されたアジアの芸術祭は、グローバルな商業主義に合致するものを生み出そうとしているように僕には見えるし、それは芸術の単一化につながると考えるからです。「こんな表現もあるのか」と世界の人が発見するようなゲートウェイにはならないから。まだ東京のほうがそういう場所になる可能性があると思います。

——日本には多様性の可能性が残っている？

宮城 欧米の芸術の世界で常に求められているのは強度です。どういう方向性になる、強度が無ければ一流ではない、プロの作品ではない。でもアジアには、儂い身体とか、あるいは揺らぎがある状態が尊重されてきたし、弱いものを愛でるという長い伝統があります。それが近代化の中で、芸術の物差しが欧米のものだけになり、弱いものを愛でる価値を尊んだ感性がどんどん消えてしまった。でも日本はそれが、オタクという言葉が上手く表しているように家の中、つまり表では欧米の価値観に合わせながら、部屋の中

で愛でることが続いてたんですね。おそらく欧米にもそういう人達はいて、JAPAN EXPOに大勢の人が来るようなことが起こったんだと思う。ただ、この10年ぐらいで日本も価値観の多様性がかなり失われてしまったと感じています。社会全体が非常に画一的に、短絡的な答えを求めようになってしまった。だからこそ「東京芸術祭」でそれを取り戻していけたらと思うんです。

——今年から始まる「東京芸術祭ワールドコンペティション」は、東京ならではの特性を活かしながら世界へのゲートウェイにつながっていますか？

宮城 その通りです。ここで作品を発表すれば世界へつながる、「東京芸術祭」があるいは東京という街がそうなれば良いなと考えた時、1番理想的なのは世界中のディレクターやキュレーターが秋に東京に来てくれることなんです。10月から11月は世界中が舞台芸術のハイシーズンで、なかなかそうは行かない。「ビジネスクラス往復、パートナーと一緒に来ていいですよ」と言える予算もないですし(笑)。だとしたら、先ほどお話しした“結び目”の一つとしてコンペティションを開催して、その審査員として一流の演出家やディレクターを招けば、審査作品はもちろん、合間に何本か観てもらえる。その中から「これはおもしろかった。うちの劇場で呼ぼう」ということが起こっていけばいいなと考えたわけです(笑)。

——なるほど！ただの競争ではないんですね。では芸術祭で上演される、ロシアのカンパニーによる全編手話の『三人姉妹』と、オスターマイヤー演出の『暴力の歴史』について、世界の演劇にお詳しい宮城さんから解説をいただけますか？

宮城 少し通好みの発言になってしまうかもしれませんが、オスターマイヤーさんは最初、センセーショナルな演出をする人として世に出てきたんです。例えば、サラ・ケインの芝居で露骨な性的表現を見せたことが演劇界で話題になりました。つまり、表現主義を忠実に継承してそれをやり切っているという、表現主義の申し子みたいな人だったわけです。それがこの数年は、オーソドックスなリアリズムの演出家として高い評価を得るようになってきた。それは付け焼き刃ではなく、リアリズムの歴史で見ても正統なんです。つまり彼は、ソ連・東ドイツ経由のリアリズムと、ドイツの表現主義との両方の資質を持った、世界の演劇史の中で王道中の王道と言える演出家。作品によってどちらかに重心が傾くので、例えば、去年、SPACで上演した『民衆の敵』はリアリズムが目立っていましたが、『暴力の歴史』は表現主義的な方が目立つかもしれません。

『三人姉妹』は、ノヴォシヴィルスク劇場のですね。これは、手話と言えは手話なんです。音の無い世界を描いているのではない僕は思います。記号として意味を持つ言葉は聞こえてこないけれども、こんな音(グラスを



「東京芸術祭2019」記者発表

はじく)やこういう音(テーブルを叩く)は存在する。つまり、僕らの日常は本来そうした音に満ちているのに、意味を持った音=言葉が耳に入ってくるから、そちらにばかり気を取られてしまう。言葉のボリュームをゼロにしてみると、他の雄弁な音が聞こえてきて、それらもドラマを奏でている。だから、手話というのが何かの欠落ではなく、ひとつの要素を封じたことによって、それまで気が付かなかった豊かさを舞台上に立ち昇らせるという作戦ですね。

——どちらの作品も今のお話で期待が倍増しました。もちろん、「東京芸術祭」全体についても、さまざまな動きに注目していきたいです。

さらに、東京芸術祭2019と連携している「東アジア文化都市2019豊島」でのイベントとして、西口公園に完成する野外劇場(グローバルリング)のこけら落としで、フランスを始め国内外でオファーが続く宮城さん演出の『マハーバーラタ ~ナラ王の冒険~』が上演されます。

宮城 グローバルリングが、たまたまSPAC(静岡県舞台芸術センター。宮城が芸術総監督)がアヴィニオン演劇祭で『マハーバーラタ ~ナラ王の冒険~』を上演した時のリング状の装置とほとんど同じサイズなので、新劇場のお披露目にぴったりかなと。1日2ステージのみですが、ぜひご覧いただければ。

——本日はありがとうございました。

取材・文:徳永京子

東京芸術祭2019

9月21日(土)~11月23日(土・祝)
東京芸術劇場、
あうるすぽっと(豊島区立舞台芸術交流センター)ほか

【プログラム詳細】東京芸術祭2019公式サイト
<https://tokyo-festival.jp>

【チケット予約】東京芸術祭チケットセンター
<https://tokyo-festival.jp/2019/ticket/>

宮城聡 SATOSHI MIYAGI

演出家。SPAC-静岡県舞台芸術センター芸術総監督。2017年、アジアでは初めてフランス・アヴィニオン演劇祭のオープニング作品に選ばれ「アンティゴネ」上演。2018年、第68回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。2019年4月フランス芸術文化勲章シュヴァリエを受賞。



©Ryota Atarashi